



~ 13
3395
3



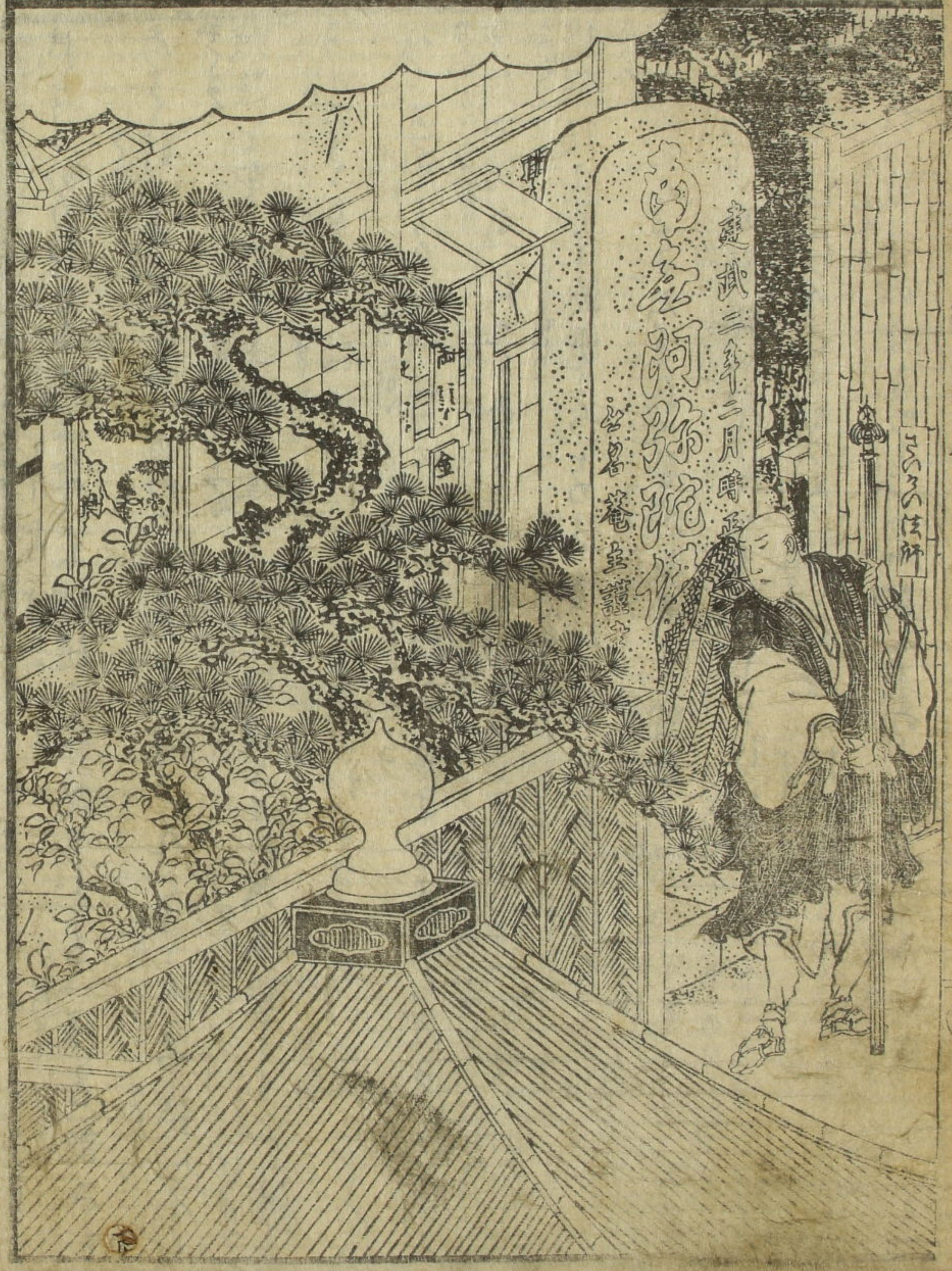
戦に討死せし。官軍宗徒の兵士ホが墳墓ありたり。院内寂寥多しとて
人ありとも見えざる。臆く走り出るとん小門前より。樵夫の山より
よあり。そのとれ西啓彼樵夫を望むとわぬ。その名寺とやん。名なる徒
の墳墓もあると。あどく物さみ。びあるともづれの時。何人の
建立したる。今の住持もまたよと向ふ。樵夫答ふ。彼道場。行人の
らんとうあると。いふもあつと。病基の老僧。魚新田の家臣。松田何かが
子ある。あま。主君の一族伊豆相模より討死しあるを。墳墓を築てそ
の菩提を吊よ。そのめの後。さうある菴室ありしが。彼僧経済よりそ
て。節儉を常と。年を控へ。堂宇全く成就とるよ。けり移る。く。
件の住持。六十余才あり。近曾遷化とありぬ。あつるよ。平生各齋
あつる。あつる。臨終二日は至る。往生を遂む。その死よ。いと

浅き。かりた。復よ。年本檀越の布施もども。一孫も散さど
あつ。貯とつとえ。あつ。のく。その足をそん。と。人。や貸けん。又
賊難とあつれ。土中み埋り。らん。後後。られ。穴穿鑿と。ま。一物も
う。さ。弟子の弱僧。後住と。り。しが。夜。行。と。く。物の。妻。と。く。り。も
ね。ら。ま。さ。り。て。同。宿。の。所。化。小。僧。新。発。意。ま。で。も。居。ら。げ。ま。し。後。は。遂。に
先住の冤鬼。夜。あ。つ。り。れ。ま。物。返。せ。と。く。現。住。の。弱。僧。を。責。し。ふ。
彼僧。悔。ま。さ。く。函。電。し。つ。ま。の。後。檀。越。の。後。ま。ま。み。該。合。し。つ。後。住。と
定めんとするよ。あつ。あ。つ。ま。老。耆。尚。も。貪。地。を。厭。ひ。ま。あ。つ。と。又。あ
あ。あ。あ。あ。弱。僧。は。い。さ。か。せ。れ。さ。う。け。り。ど。あ。あ。あ。可。惜。道。場。の
忽。地。ま。位。ま。り。て。ゆ。あ。の。と。の。ま。り。各。寺。の。檀。那。も。と。あ。つ。と。家。も。道。の
遠。れ。ば。彼。寺。の。ま。り。あ。つ。つ。ら。ま。あ。つ。あ。つ。ね。ど。風。声。近。鄰。ま。あ。つ。と

色月三



えんご
戒壇石の
けび
ころね
羅文



建武三年二月時正
南無阿彌陀佛
松名菴主謹

松名菴主謹

めく。いと昔々〜おほえいと田舎人のおちるやうあり。向ぬるまじく
 長く〜物々しげ西啓同くげよあるるもあり。十戒五通の老
 法師も最期の妄想より。宿覺を喪ふるあり。憐れしく。と回
 つ。鉦うち鳴ら〜回向する間も。樵夫のやがて〜去りぬ。かく
 西啓と東の山崎をゆく。又十餘町あり。や日も暮みんと
 さくも此らうの日々。緩さけ〜宿る家も。〜夜ハ
 ふる〜大磯小磯と〜とて。あつ〜のそだちやぞ。さう
 山を〜。袖敷が浦曲を過ると。夜ハ既ハ更闇。磯うつ
 あり浪十鳥の声。いと寒さ。氷入〜。さけけ月ハ送る。と
 折し〜。あま磯列松の木蔭より。おどろ〜。大男つと走
 出。西啓が胸さうと〜。念笠の内を〜。覗つ〜。打

けさなる幸さ。ゆ〜夜ハ浦風ハ吹さ〜。立あ〜。つとえ
 て一人の旅客ふあ〜。と〜。羅ふ係するのハ。荃をえ〜。佛法を
 あり。遮莫その蔽。經袍利〜。一杯の酒ハ換みん。ゆ〜。怖ま
 そ。〜。も果ぞ。雄姿の巻と。握り固〜。打仆さんと〜。揚ま〜。
 西啓ハ〜。だ〜。気色とも〜。ゆ〜。陽杖〜。ほ〜。荒男が向
 鷹を丁と。拂へ〜。横さ〜。撲地と。顛ぶ〜。踏踏〜。えむ〜。や〜。
 ち〜。と〜。借処ハ。臥ハ毛毯の〜。衣ハ海松の〜。賊僧忽〜。
 まり〜。つ。秃驢。逃〜。と〜。腹さ〜。と〜。ほ〜。け〜。木刀引ぬ〜。鉄
 らん〜。と〜。西啓。借〜。と〜。見〜。と〜。秘密の印相と。締〜。と〜。被
 忽地筋骨疎縮〜。立〜。隨ハ動〜。た〜。ぬ〜。只目と。睜〜。口〜。開〜。
 せん〜。と〜。げ〜。と〜。と〜。と〜。倒〜。と〜。荒男ハ。形勢を〜。と〜。



西の法師

吾儕と愛しあひあむ。子のぞくつらふ。父母のつひをう
 隨後せむべし。ともかくもよたよ計策あり。翼より且く彼寺ふち
 あり。あゆりどと煮るまじ。西宮うち哀路。汝も明白は彼寺へ尋ねる日。
 廉忽の挙動し。里入ふ曉はるま。よく播く。如此くよまうせ。
 され又箇様くよひみぐり。まほそのみと競ふ。されは西賊
 ましく笑坪よ入り。肝膽を傾く。それと同互ふ再會と契る。ほども。
 多ひの外時もろり。曉方ちうくまり。西宮やちう立あがり。
 備曲遙は別まき。白映黒映の舊の松蔭に立躲ま。彼方も
 ちうどどろり。鳴呼彼兇僧原行等の愚星を。ちう虎狼し。
 今亦との翼を。好計愚民を。天羅終は備を
 ことろん。只憎ても憎む。梟獍ちうの外道あり。是ハてあ

後寺の現任へ前の院主の弟子あり。年も弱く才学も下り。拙
 生道ふあめり。山寺のまじ。檀越もあ。法道を嗣
 たる。白映黒映。先住の幽鬼。寺は愛惜と
 多ひ惑ひ。頻よその崇と。人あ。せむ行装し。何れも
 ちう逃去。檀越の良賊あると。歎た後住と居んと。り
 その人と。小抖敷行脚の老僧も。この容子。怖して。
 され住持。遂は住の空院と。狐狸その栖と
 なる。西宮ハ白映黒映。列。次の日。底
 倉の山家と募化し。その夕。名寺のほ。草舎
 宿を投し。夫婦信や。夕餐を。四表八
 表の物。師又。ええ。名判

と振る雲水は伴まゝ入る。いとさく覺ゆりまの冥地より出ぬ。
 東國の人と見えぬぬのを若くくばの結縁のなる名告る。
 うとしの西習はる。累僧ハ律の國なる。何ガの院に徒勞なり。
 のつる近曾彼知を辞し去り。諸國を修行し。普く衆生を濟
 度えんとすふの。さればあゝ宿り風不冷ひ。野さしの旅は死
 んと預ふ。あゝと名告るんも嗚呼がな。がくてぞあうく。親
 念と勸む。あうく。いと殊勝めり。く回答する。あうく。
 夫婦ハまじく感激し。師又固より衆生濟度の志ふく。あうく。
 志が。あゝの里よ。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 與りあうんや。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 の中潜はれ。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。

あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 又あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 大門の空名寺とりの道場なり。閑基の僧年来者番ふ。あうく。あうく。
 後さまぐの怪異あり。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 久しくあうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 是と誘へども。その崇の。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 師又の。彼冤寃とゆる脱せしめ。且く彼所は。あうく。あうく。あうく。あうく。
 福なり。いふ小諾さ。あうんや。あうんや。あうんや。あうんや。あうんや。あうんや。
 衆生もあうく。慈雲ハ掩ざり。邦國もあうく。若く。あうく。あうく。あうく。あうく。
 慈悲なり。冤魂得脱の。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。
 され今夜彼外は止宿し。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。あうく。

つとて。その寛普と吾願は濟度を求む。それ法と説寂を示す。且金
剛經一卷を讀く引接せり。今ハヤハ後疑ひあり。それ又就く同
べたるあり。檀越の黨ハさうと。年未の寺ハ疎くさびののそ。悉
く集合せ。と滅しやうふせえちうと。衆人渴仰隨喜の候と。た
まひつ。數回西宮と礼拜し。寔よの師又ハ活佛あり。おのせむ
らそ。さうとちうねさ。寛普の頓ハ來仏ハちうらめ。何ガ男ハ早版
の用意し。進んせよ。彼がハ五七人の壯俊と。さう。精中ハあまら
せよと。ちう。あつてそのひまけと。僕ハ二三人を残り。おん。西宮ハ
陪後。さう。その化ののどもハ此ハけ。さう。走ら。碗折敷ハ至る。正
公を用ひ。さうと。尺ある。家具と。二人。さう。擔。あ。版と盛。蒸美と。係て
これと西宮と。さう。め。いと。叮。響。又。餐。さう。さ。復。又。彼此の。里。人。答

悉く各寺ハ群。あ。つ。野。せ。さ。さ。居。さ。う。ぬ。と。西。宮。信。と。ん。さ。う。
て。今。ら。お。本。ま。る。の。の。誰。う。先。住。の。金。と。あ。が。う。その。人。寂。と。幸。よ。さ。う。び
か。ほ。く。り。ひ。も。出。さ。る。明。白。よ。あ。じ。く。と。い。ふ。さ。え。さ。答。る。の。は。西。宮。又
声。と。さ。う。し。れ。前。夜。先。住。の。寛。普。と。同。答。し。く。さ。う。その。人。と。さ。う。わ。く
て。さ。う。後。さ。う。た。ら。う。の。き。脱。ん。と。せ。ば。蓋。宅。の。老。弱。の。崇。と。崇。と。
え。さ。一。人。も。信。る。の。あ。じ。或。ハ。時。疫。或。ハ。瘧。疾。種。く。の。難。病。ハ。傳。り。て。死。耻
と。さ。う。さん。ら。一。言。の。下。ハ。先。非。を。悔。く。惡。報。と。脱。と。さ。う。の。あ。や。い。う。や。と。
ほ。う。これ。が。忽。地。年。の。齡。五。十。の。あ。ま。り。さ。う。男。さ。う。く。這。出。さ。う。さ。う。さ。う。
かく。發。覺。さ。う。さ。う。の。匿。よ。う。は。某。年。未。前。の。院。主。さ。う。金。と。傳。り。さ。う。
彼此。の。人。ハ。貸。す。利。子。と。債。り。借。り。人。さ。う。ハ。謝。浪。を。受。院。主。さ。う。ハ。辛。苦
後。と。ゆ。く。その。蔭。を。蒙。る。と。え。さ。う。じ。は。院。を。既。ハ。去。り。さ。う。さ。う。

とうとうぬえ發りて密に同宿の法師と相済む。その形を盗ら
しんげ。さるる物の方よりゆひが。げはあれたるのそまをのこ
近曾先任の宛裏夜まありりれ物とせば毎人ちまどりくとのか
を苦しめ。後には淨願の境よりえん。さるる預り。金の殺
如此くま。形よとえ。返りま。師又たが。身を妻子
の命と形ひ多くとり。こととけく。の回とあり。衆皆舌と巻。い
西啓とさる。敬と西啓又伴の男よ。善哉懺悔あり。五逆十悪も頓滅
せざる。仕速よ。金のと。それ加持。後の禍を穰ひ
ほさ。ま。怒怒よ。と。それと。け。彼男の
威。顔を蒼ざ。家よ。走り。人よ。貸。金を

加。この教よ。合。形。も。ま。を。西啓。遍
け。西啓。里人。ホ。金。と。形。を。引。あ。さ。さ。二。百。餘。金
あり。それと。舊の。と。押。包。も。お。長。が。ほ。う。置。こ。て。入。り。の
金。寺。よ。返。り。と。り。ど。の。主。役。一。れ。別。み。さ。べ。さ。入。り。あ。り
が。先。任。の。る。お。追。薦。の。法。會。と。待。行。し。海。あ。ま。且。今。あ。り。携。を
後。覆。一。め。を。遠。り。莫。大。の。功。徳。を。さ。さ。バ。亡。竟。追。善。ハ。さ。く。一。御。の
良。縣。さ。う。と。冥。福。と。蒙。る。べ。し。の。期。ま。が。ハ。誰。も。あ。れ。の。金。を
あ。ぐ。り。の。へ。と。り。へ。里。人。ホ。け。も。あ。く。ど。ま。づ。う。さ。る。も。そ。ろ。し。金。を
束。の。間。も。藏。り。の。の。師。又。且。く。行。囊。の。内。も。藏。り。さ。る。か。く
え。う。ひ。め。つ。る。べ。し。と。て。さ。う。さ。く。金。を。西。啓。よ。ま。り。又。の。海。と。ま。り
や。師。又。ね。ぐ。く。へ。今。さ。う。後。お。し。の。寺。の。光。を。ま。り。さ。り。さ。る。の。こ



丁奴ハテの形勢ふりこく驚を走りうらうてらなくと嘆び信ふよき五
 ハとや俯しよ什まろく。縛ぬらう。そのとくは蓮葉ハ。こころぬ声よ
 驚を覺え何れぞして起ゆ。夫が血塗まらるるかえり仰天
 主役さやぐみ勅るは頼入るもあやざれば猛は近隣後を呼び
 集合てかくと告る小衆皆ち郎五が死がまの異うると怪こく。縁
 故を問ふ蓮葉答る。うが牙の頃日におおられれば今朝も目も
 こあまがら。ま母取房ふけりしが夫まが起ゆ。りく程もあく死
 むひぬ。その存存するもあまらるる死は。やをて丁奴汝行と
 進せしむ。明白は覚えしとけりよ。丁奴も又不審に僕別よ
 進せしむ。家の日來朝茶を好むもふまれば母のうら
 たり茶を煮とて。只一碗を進せしむ。のここしは蓮葉は

冷笑ひ朝茶を喫て死するのうら世の老爺婆へ毎朝は死
 せやハあ。こころは仔細くして。と責問ハ丁奴らうとあひ惑ひは
 細ありやま。あまらるる僕もぐら水と汲入き。ぶくも煮ゆる茶
 を進せしむ。せくまらあまらるる。ぢいよ及ばど。只あまらるる。僕面あり
 ち茶を喫て。試み。のち茶を毒あり。忽ち死ん。さあ
 ハ疑いと散りあまらるる。さあまらるる。かき。丁奴ハ。さ
 中らるる茶碗よ。あまらるる。と茶汲入。吹さ。つ。喫て。半よ。こ
 ど。忽ち面土のど。あり。叫苦一声。叫びもあまらるる。九孔。うら。血漬
 撞と顛び。死。蓮葉ハ。い。これと。あまらるる。の。古。は。ひ。
 ま。茶。毒。あり。らん。らん。覆。ん。ん。一人。茶。茶。を。
 あり。目。の中。へ。流。る。る。男。も。青。も。猪。婆。蛇。の。煮。爛。と。

雲霧集 卷三

風志を果さんゆめと尋思し。誅生のいづりふ近に跡を立出
 ず。夜を日は継ぎきりたる夜。三月七日の夕ぐれとあり底倉へま
 僅よ一里むくりと隔とる。山里まぎれ来たり。暮ぬ先少とありば。
 ころ頻ふ忙しき。と見えむ村梢をみよる。椋の梢よ鳥群居
 てのとかいづきくまき声の竹とまき耳よさうり。入相の鐘も。
 ころころ悲しき。忽ち肉動たり。神も引入るやうよあは
 えしうべ。あざり彼亦を見えりつ。あまふのとき。子どもらが
 うへよ。うろくぬみや出来たり。又が兄の家も幸あたるやありえ
 ころもたなまきぬ鳥の啼きまきると。むらぐら。又連忙しき
 いそぐはゆくよ日ハ既まきとて天へ結陰七日の月ハ影もえせぬ
 と去年本一門の推松も七松居士が面敷し。葉をくむ立り。

ころ。武章つと入りまき。うろくが兄ハ恙なくかたむる。二
 とそ糸りゆくと吸門が蓮葉との声をめとせむ。蒸襖の回より
 ころ。周章ころ。套房のこふ支りゆえ猛は紅粉を洗ひあじ。
 喪服を被更くやうやくよこち出叔く来ぬひつる。まぎら
 と誘引あぞ。武章ハ嫂が衣後のいろのこをえり。さてふが兄ハ
 世に去ぬひあたと猜しまき。端まきも問ど草鞋を解とる
 対ひや。寒暖と速又まが牙とよ来つ。縁をえにが横死す
 らがるがびえあきとれば蓮葉のまき目と押扶ひ。のり
 牙ハ。過はゆくとあたるまき。叙く寛狂は係りて妻と喪ひるは別れ
 ちろく草あめとこ。まきとてよ来ぬあうひもあき。まが夫ハ節句の
 朝頓えり。果ぬひぬ。そのあハ如き。箇様くまき。音徳彼女

雲絶間巻三

三

蛇の。丁ぬが。からもる。物。を。武。章。の。果。を。拘。を
 打。哀。悼。の。涙。堰。の。ど。け。く。さ。ふ。兄。が。最。期。の。為。体。疑。した
 り。も。あ。ま。る。母。あ。づ。同。滞。ま。それ。う。と。あ。ふ。も。ほ。あ。ら。ど。い。ん
 か。せ。と。道。と。が。の。ら。ろ。が。ま。も。う。み。至。る。の。休。を。愁。傷。や。
 う。さ。う。り。け。ま。か。く。て。武。章。の。や。紅。淚。を。拭。ひ。あ。さ。め。く。蓮。葉。が。頃。日
 の。嫌。く。る。さ。を。竭。し。と。悼。ま。笑。え。又。数。回。嘆。息。し。く。ま。と。で。も。あ。ま。る。げ。
 兄。の。七。日。の。名。ひ。た。や。今。宵。初。七。の。速。夜。と。い。せ。め。く。夜。い。も。回。向。の
 さ。め。と。し。ひ。か。け。て。ほ。と。ゆ。成。立。も。力。あ。く。あ。つ。る。家。廟。の。亮。隔。も。香。乃
 煙。子。賊。り。い。ど。だ。ら。う。を。枚。原。の。席。の。位。牌。よ。う。ち。對。ひ。あ。み。限。り。火
 う。ん。は。説。猶。名。の。声。幽。ま。り。侍。亦。は。雷。神。法師。の。黒。雲。を。お。く。外。面。よ
 立。在。ま。る。蕉。火。を。あ。げ。ご。く。門。柱。も。表。札。と。仰。ぎ。膽。つ。と。こ。う。と

り。よ。黒。雲。や。が。う。ま。り。入。り。寺。名。寺。本。臨。り。と。家。門。あ。ぞ。蓮。葉
 め。び。ら。う。慌。お。め。と。い。え。ん。と。ぬ。め。り。け。く。出。迎。へ。つ。客。房。よ
 秀。引。黒。雲。を。ま。の。後。方。お。ゆ。う。と。茶。を。さ。め。う。ち。含。咲。さ。ら。や。う。こ。の
 猛。ま。ま。し。入。ま。さ。け。り。よ。う。ち。あ。う。い。め。ら。づ。本。ぬ。ひ。つ。ぞ。黍。粒。と。い。ふ。声。も。
 面。影。も。あ。く。づ。ら。い。ど。の。婿。婦。ハ。伸。崎。ま。く。あ。ひ。え。つ。蓮。葉。と。あ。り。ハ
 小。ぞ。雷。神。忽。地。胸。う。ち。ま。さ。だ。ら。い。う。み。と。同。う。の。言。語。と。く。う。の
 夜。一。つ。目。を。斜。み。と。れ。を。え。ま。ま。蓮。葉。も。又。物。り。ひ。く。げ。ま。結。は。ら。ん。
 庭。幅。の。方。へ。退。物。り。さ。や。う。稀。多。便。宜。を。ほ。く。彼。人。を。あ。ま。る。ん。ど。あ。や
 ち。武。章。ら。み。来。さ。け。ら。づ。ら。ち。う。け。て。ハ。相。決。か。じ。愁。よ。ら。ん。と。あ。ら。ハ
 あ。う。り。あ。ん。と。尋。思。し。く。家。庭。の。さ。さ。ら。る。襖。の。間。は。顔。さ。り。入。り。ハ
 け。身。も。去。年。の。冬。結。ゆ。ひ。る。雪。名。寺。よ。此。度。入。院。さ。ぬ。ひ。つ。雷。神。上



大館 尊女



天福元年
仁治二年
寛文三年

大館 尊女

大館 尊女



蒼天よ我揚し。雲よ紛き。失ふなり。武章ハあむり
 ち。瞻る。覚ふ。今ハらう安し。あはくは驛だる
 気色もあ。近隣徒よ告る。領主へ祈をうんとて
 直は外面よ立出。憐べ。武章ハ朴實あり。寛在ふ世を
 狭く又憐く。嫂を殺せり。宜き宿因の業果あり。や。されば連累
 ハ日來夫を悔り。そめ武章よ調戲し。ゆきび雷神よ環會す。
 不良のらう。天その不負不茂を憎く。忽地よ罰し
 る。故ある。雷神ハ墮落し。彼ガ奸計より起る。又
 毒婦よづら。夫を毒殺せりと。あはくは独婆蛇て。
 ち。立ぬ。死した。その罪脱れ。あはくは彼
 幸あり。武章よ殺され。意中の救計。あはくは及ぶ。とりのく。

汚し。元を汚さ。実ハ一大幸あり。又ち。五武泰ハ斗
 既ハ羊百よ及び。それハ似たる淫婦を娶り。とらる。あはくは
 面叱し。禍遠よその元よ及び。夫婦ハ人の大倫あり。彼主命こ
 と。思慮あり。度も固辞べ。玉を抱く。罪あり。とらる。
 常言を。又雷神ハ奸悪を逞く。里人を送る。
 一旦浮雲の富を。ゆく。武章よ着破る。
 喪家の狗と。亦は神仏の冥罰あり。天細絲ハ漏れ。と
 今ハ四人を論ぶ。武章の。罪あり。罪あり。罪あり。罪あり。
 過世の業。至孝の存を。揚家を。疑ふべ。善報多。美言の
 あり。悪し。

